

小島靖子
小福田史男 編著

『ものづくりとヒロシマの授業』

八王子養護学校の実践

(太郎次郎社)

枝広美穂子

この本の大半は、衣食住に関する「ものづくり」の懇切丁寧な説明に費され、詳しい作業の手順、豊富な写真と図解によって、実践に活用できるように

編まれています。

食 一、小麦刈りからうどんづくりまで

二、地引網から干もの練りものづくり

三、テングサとりから寒天づくりまで

衣 一、養蚕から絹織物へ

二、原毛刈りから毛織物・毛布づくり

住 一、原木の伐りだしから椅子づくり

二、丸太を組んで隠れ家づくり

三、木や竹で臼・木鉢・ざるづくり

これらの項目でお分かりのように、「できるだけ原料から」という先生方の思いが貫かれています。食の大部分を海外に依存し、手仕事は風前の灯という現在の日本の状況の中で、この思いを実行するのは容易ではありません。道具作りからはじめたり、作り方を知っている人を探したり……遠くから近くから暖い手がさしのべられます。小麦畑を提供する堀口さん。石臼を下さる内田さん、粉ふるいを作る斎藤さん、手とり足とり教えて下さる数限りない

先生が登場します。

「できなければ手伝ってあげるよ。なあに、そのうち一人でできるようになるさ」常にはほえみを浮かべ、あせることもなく、淡々とみんなと一緒に仕事をする真綿づくりのおばあさん。担任のいうことはなかなか聞かないような生徒達が、おばあさんの言うことは素直に聞きます。初めて養護の子に接し、戸惑う堀口さんに「私たちに話をするように話してください」とお願いする先生。リヤカーによる倒木運びをみるにみかねて、トラックやショベル・カーを出してしまう工事場のおじさん、加藤牧場のおじさん、戸田の干物工場のおじさんおばさん、テングサとりの金崎おじさんなど——そこでは、子どもも教師も全く同じ立場で、感動したり苦労したりしながら、共に学びあいます。

それにしても、八王子の先生方の決して、あきらめない、懸命な姿には舌を巻きます。電話帳で調べる。「ある」と聞けば、早速バスで出かける。重い原木

の鉢を、新潟の村から（八王子は東京）代わる代わる抱いて持ち帰る。夜九時に再び登校し蚕の世話をする。糸とりのできる人を訪ね歩く。学校に職人さんを呼んで来る。この行動力。おまけに、教室中粉だらけになっても、粉の気持ちよさによって、ものに対する感性が磨かれてゆくとはほえみ、何もなかった子に対しても「力仕事はできなくても、みんなの活動を見ていて、みんなの作った遊具にのろうとして出てくるのだ。いねむりもいい。」という抱容力。そして、好奇心一杯で工夫に怠りなく、ある時は、生徒そっちのけで夢中になってしまう愉快な先生……この飾り気のない姿こそ、子ども達にやる気をおこさせ、作業にのめりこませる源に違いありません。子供たちは「ガンバレ」「しっかり」とか叱咤激励によってではなく、一緒に汗まみれになる先生によって、心をゆさぶられ体を動かすのです。

又、「ヒロシマの授業」でも、生徒達はヒロシマ

と真正面から取り組んでいます。

この「平和の授業」は、丸木美術館（埼玉県東松山市・原爆の絵の展示）、アニメ「はだしのゲン」、映画「おこりじぞう」鑑賞——被爆体験者の手記の読みきかせ——八王子大空襲における父母の体験談を聞く——ヒロシマへの修学旅行（資料館見学・被爆者の話を聞く）という過程で進められます。その中で、原爆病院から、養護学校の子らはどうせわかわらないだろうと見くだして、人の紹介を断わられたりもします。

が、この学習は教師の予想をはるかに超えたり、ねりを生み、被爆者に対する共感の中から、子どもたちの声が上がります。

「差別って私たちにも関係あることだよ。私たち、やらないうちからできないと思われている。だれだって何かできることはあるはずだ。何かいわれたら言っていた方がいい。言えない人もいるから、みんな言っていた方がいい。私はヒロシマで生き

かたを覚えてきた。」（恵子さん）

「実は僕は台湾人だ。今まで恥ずかしいと隠してきた。でも、被爆者の話を聞いて、隠しても仕方がないと思った。オレの名前は楊。すばらしい名前だと思う。」（広クン）

「へいわをかえせ？ かえせはへんだ。へいわをつくらう！ つくらうだよ」（木村君）

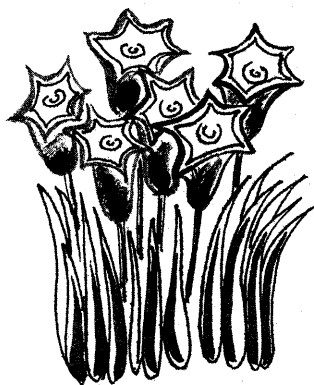
その後、大学に進みたいと希望する高三7名による都立大での「ヒロシマから学んだもの」というテーマの合同授業の中でも、彼らは、打って出ます。

この時の事を、ゼミの小沢教授は次のように書いておられます。

「大学は何のためにあるのですか」と聞かれ、私は返答につまった。養護学校の子らを研究対象とすることはあっても入学は許さないような大学とは何であらうか……

養護学校の子らは、「所有すること」をめざす生

き方をとれない。そうした価値感のもとでは抑圧されるのみである。高い学歴やポスト、多くの財産、こうしたものを所有することをよしとする価値感、これに見あった喜びかたにしばられているかぎり、自分をいやしめ殺していくしかない。そうでなく、「人として生きあう」という生きかた・価値感、これにあった喜びかたをすることによってのみ、人間として生きてゆけるのである。自分だけでなく、自分とかわる他者のすべてが、こうした価値感・学



びかたをすることによって、自他の共存が可能になる。むしろ、「人として生きあう」ほうが、はるかにラクに生きられる。養護の子らは、このような生きかたをしませんかと、近い位置にいる私たちに声をかけているのではないだろうか。

この子らの純粋な声に、私も深く耳を傾け続けてゆきたいと思いました。

(はるにれの会)